

## 私の家族史研究をかえりみて

——「正倉院籍帳」を場として——

布村 一夫

あるいは「日本古代籍帳」とも、あるいは「正倉院籍帳」ともいわれているのは、大宝二年（七〇二）の御野国と筑豊諸国との戸籍、養老五年（七二二）の下総国戸籍、そのあとの諸国の計帳、そして陸奥国損益帳とよばれている文書などを、ひとまとめにしたものである。これが『大日本古代文書』第一巻におさめられて出版されたのが、明治三四年（一九〇一）のことであり、このときからこの「籍帳」にたいする近代的な研究がはじまるとしてもよい。

この『大日本古文書』第一巻を、二〇〇円で、町はずれの古本屋でかいもとめたのは、この国への強制的な帰還、いわゆる引きあげの年であった。佐世保に上陸して、金一千円也をもらって、熊本にたどりついたが、この年のくれに、この本を買ったのである。そのころとしては、すごく高価であったが、買ったことはまちがいないのだから、そのときは、これこそが私の後半生であるとしたためらしい。いまになってみると、この本は、この島国でのわたしを、たしかにしばらくつけてきたし、いまもしばりつけている。

もの心もつかないうちから、（旧）満州で育ってきたが——これもはなやかな大正デモクラシーのうらにある不景気による失業のためである——、三〇才になるまえには、満鉄調査部の一部である大連図書館につとめて、本の整理をしながら、中国史に心をよせていた。調査部での北方調査をするという調査マンの仕事に、いや気がさしたあとの転職であった。もち

ろん、そのころには「支那学」ではなくて、「支那研究」でなければならぬというような新しい動きもあって、それに心をむけはしたものの、わたしは『滿鉄調査月報』に、イヴァン・イリイチ・ザハーロフ（一八一四—一八八五）の論文「支那人の歴史的考察」や『滿州語史』などを反訳したりなどもした。いわゆるロシア支那学を紹介したものである。この大連図書館では、西ヨーロッパ諸国による中国研究の文献が数多くあつめられていたが、ロシア人による中国研究に関しては、手うすであったことはたしかである。

そのころわたしはすでに、一九三九年に邦訳されたロイ『原始社会』（一九二〇年刊）を読んで、渡部義通氏の『日本母系時代の研究』（一九三二年刊）なども知っていた。これらは北滿の小數諸民族にたいする関心とつながっており、清朝の太祖ヌルハチ汗のころの、未開状態をぬけだしていったらしい滿州族の生活に関連して、シロコゴロフのトゥングース族の民族学的研究を読んだりもした。白鳥庫吉氏が滿鉄をうごかしての朝鮮・滿州の歴史の研究には、津田左右吉氏も池内宏氏なども参加しているが、これらの人たちの合理主義にもとづいた成果も学んでいた。戦前の神がかりな日本史とは縁がなかったし、上代日本にも奇妙な婚姻形態がたくさんあることも知ることができた。ここあたりが、わたしの後半生における「籍帳」と民族学とのむすびつきの芽があつたらしい。

戦争で死ななかつた者は、きびしい戦後の飯をくって生きぬかねばならなかつたが、学問にささげることがさらにつらいことであつた。それでもやはり、神がかり日本史をはらいきよめねばならないときでもあつたのである。

## 二

わたしは「籍帳」とむすびつけられたとはいへ、それはたやすい道ではなかつた。

「籍帳」についてのこれまでの研究労作をさがしもとめて読むのもつらいことであつた。新見吉治氏の論文「中古初期における族制」一一三（『史学雑誌』二〇篇第二一四号）が、一九〇九年（明治四二年）にかかれてゐるのは、まさしくおどろきをとおりこしていた。わたしが生れる三年まえにかかれたこの論文をおさめている『史学雑誌』は、熊本の（旧）第五高等学校には所蔵されてきなかつた。これを手でうつしとるために、わたしは週一回は九州大学の図書室に通わざるを得な

かった。

このころわたしは、水戸の県立図書館長に推薦されていたのをことわって、つくられたばかりの、小さい新制大学につとめていた。一九四八年につくられ、一九五〇年には専門課程がはじまったのであるが、そこでわたしは家族史をおしえることになったのである。家族関係という科目があったが、これだけでは十分ではないということでの家族史である。このころとしても、そして今になっても、家族史を教えているところは、あまりないようであるが、こうしてわたしは、花嫁大学とけなされもしているところで、二五年あまりものあいだ、この講義をしてきたことになる。もちろん、このほかに、日本史や西洋史それに社会学なども教えざるを得なかった。ここあたりが、田舎の新制大学のなやみであったのであるが、教えるものは、いやおうなく、みずからの巾をひろげざるを得ないという幸福をもったのである。たとえば英文学専攻のものに、西洋史という名でイギリス近代史を講義しながら、古典経済学者のアダム・スミスという家長的家族の解体を学んだ。スミスのあとのダヴード・リカードがキリスト教徒の女と結婚するために、父にそむいてユダヤ教をすてたが、やはり家父長的にふるまったことを知ったのである。

講義の成果を、一冊の本にみのらせることはできなかったが、その間にみずから専攻としてさぐりつづけてきた「籍帳」についてのいくつかの論文を発表した。しかもこのときにはもはや四〇才代にはいって、あまりにもおそい出立といわねばならなかったが、それでも戦後のこのような研究生活は、やはりめぐまれたものであったらしい。

「籍帳」については、つぎのような論文を書いた。

- (1) 「正倉院籍帳における親族呼称」、『歴史学研究』第二二二号（一九五七年一〇月）。
- (2) 「班田農民・奴婢の性関係——下戸あるいは二・三婦——」、『歴史評論』第二六〇号（一九七二年三月）。
- (3) 「籍帳親族名称についての訂補——郷戸構成の把握のために——」、『歴史学研究』第四六〇号（一九七八年九月）。
- (4) 「『籍帳』における離婚と再婚——律令と現実——」、『歴史評論』第三五九号（一九八〇年三月）。
- (5) 「持統朝における出産の異常——里の人口構成をもとめて——」、『歴史評論』第三八八号（一九八二年八月）。

(6) 「下総国郷戸のなかの『家』——日本令における戸主・家長の理解のために——」、『歴史学研究』第五二五号（一九八四月二月）。

(7) 「阿毎氏。氏と家と——親族双方制（俗称の双系制）は存在しなかった——」、『歴史評論』第四二〇号（一九八五年四月）。

最初の論文を発表したのは、一九五七年であるから、ひきあげてきてから一〇年もあとのことである。このようにおくれたのは、さきの新見論文におどろき、ついで加藤常賢氏がその著作『支那古代家族制度研究』（一九四〇年刊）で、フレージャーなどをつかっているのに、おしえられたからでもある。新見論文は漢字の知識を基礎にしているが、加藤著作は、モルガンをうけついでフレージャーによる古典民族学の知識、そのあとのオーストラリア諸族にみられる階級婚制度（これをみいだして、モルガンにしろせたL・フェイスンとフレージャーは知己であった）、そしてイギリス社会人類学者のタイラーとリヴァーズによるデュアル・オルガニゼーション（二位一体的な社会組織としての二分組織）の規定（これとモルガンのトゥラン・ガノワン式類別制親族名称体系とが照応するとの証明）をもとにして、漢字の本原的な意味を解明し、原始中国における二分組織の存在を証明したのである。

加藤さんはみずからの業績をみずから高く評価しているのを、なにかで読んだ記憶があるが、たしかにそのとおりで、中国人類学者によってもなされなかった古代中国についての新しい研究をなしたとげた。これに反して、古代日本史の分野では、モルガンにみのつた古典民族学、それをうけついでイギリス社会人類学の成果をうけいれるというようなことはみられなかった。わずかに京都大学の西田直二郎氏がイギリス留学で、社会人類学を学んでかえり、日本にもトーマティズムがあったとしてただである。このすぐれた先駆的な業績も、そのあと発展させられていない。せっかくの外国留学の成果をみずからにすてさり、戦意加算につきすんでしまった。西田氏の教えをうけた三品彰英氏は、戦前にロイのアメリカ文化人類学をまなんでかえっているが、反モルガンのであった（アメリカ文化人類学は先行者モルガンを評価できなかつた）。ただ戦後になって、彼が原始日本に二分組織があったとしているのをみとめねばならない。このころにはわたしも「神々の

結婚——異世代婚と二分組織——」（『民族学研究』一九六〇年六月号）をかいている。

三

そのころ日本地理の研究で有名であったポポフ教授が、陸軍少将の肩章をつけて、大連図書館の接收にやってきた。彼は日露戦争のまえに、旅順市（ポート・アーサー）で生れたということであり、日本語に熟達していたが、わざわざ日本語通訳をつれてきた。その彼は、モスクワの東洋学研究所にとめていたが、大連図書館にある中国研究に関するヨーロッパ諸国語による貴重書のリストをつくらせ、それらを箱づめにして、本国へおくらせてしまった。戦利品だろうが、最近聞くとこれによると、これらの貴重書は、中国へかえされ、いまは北京にあるという。ポポフはこんな貴重なものを、植民地におくべきではないといていたが、いまの中国も、この返還された貴重書を、大連図書館にもどさず、北京においているのは、まさにポポフのいうように処理しているためかもしれない。中国にとっては、一地方都市にすぎない大連にある大連図書館は、いまは市立となっている。戦前の日本にとっては、大連はいわゆる大陸経営の出張拠点であった。そして満鉄大連図書館は、ウラジオストクにある極東大学、ハノイにあったフランスの極東学院にあたるようなものであって、数人の支那学者をもっていた。このような大連図書館にとめていたところに、わたしはエム・コヴァレフスキー（一八五一—一九一六）の著作『家族の財産の起原と発展の概要』をよむことができたのである。

コヴァレフスキーのことを知ったのは、ハルピンにとめていたところである。ハルピン駅からまっすぐに坂をのぼったところに、中央広場がある。そこにスラヴ正教の中央寺院がたてられているが、そのまわりの一画に、ハルピン博物館があった。それは帝政ロシア時代からのもので、（偽）満州国がつくられ、東支鉄道が満鉄にゆずりわたされたあとも、ハルピンにのこっていた白系ロシア人（一七年革命からの亡命者たち）のうちの知識者のたまり場であったようである。これは東支鉄道図書館とともに、ウラジオストク極東大学の出店のようでもあった。満州国に接收もされずに、淋しくとりのこされていた名ばかりのハルピン博物館にとめていた一人が、モスクワ大学で、コヴァレフスキーの講義をきいたというのである。その人は口をきわめてコヴァレフスキーをほめたたえたが、コヴァレフスキーの著書の一冊も、ハルピンでさがしだす

ことはできなかった。

一八五一年に生れたコヴァレフスキーは、一八七七年から八七年までモスクワ大学の教授をつとめたが、あまりにも進歩的であるとして、退職させられた。そのあと、ヨーロッパ諸国で亡命生活をおくり、一九〇五年革命のあと帰国し、一九〇七年には上院議員となり、一九二六年に、すなわち一七年革命の前年に死去した。これは彼にとつて幸いであった。一七年は彼をあまりにも保守的であるとして追放したかもしれないからである。

コヴァレフスキーは一八七八年にアメリカへ行き、モルガン『古代社会』（一八七七年刊）をもちかえっている。この本のことをマルクスをつたえているし、さらにじぶんの著作『共産体的土地所有』（一八七九年刊）を贈ったりしている。この本のコピーを、わたしが入手したのは、ハルピンで題名を知ってからで、三〇年あまりもあとのことである。いまでは復刻されているが、入手困難な本であった。ロンドンのブリティッシュ・ミュージアムにも、ワシントンのコングレス・ライブラリーにも所蔵されていなかった。

それにしてもコヴァレフスキーは、この著作のなかで、「親族オブシチーナ」、「家族オブシチーナ」、「村落オブシチーナ」といい、このオブシチーナをフランス語のコンミュニティンにおおしている。イギリス語のコンミュニティにあたるが、福田徳三氏はロシアの「ザードルガ」を「家族共産体」とする。「家族オブシチーナ」↓「家族コンミュニティ」↓「家族共産体」と訳されてきているが、いまでは「家族共同体」といわれさえする。戦前に「村落共産体」といわれたものが、いまでは「村落共同体」とされているのとあいまって、この「共同体」が、この国の共同体論をあいまいなものにしているのである。原始のトライブ（部族）をゲマインヴェーゼンすなわち原始の「共同体」とするならば、村落ゲマインデを「村落共産体」と、家族ゲマインシャフトを「家族協同体」として、区別したいものである。ちなみに、内田銀蔵氏は、一八九八年（明治三一年）の大学院卒業論文のなかで、コヴァレフスキーの著作『ロシアの現代の慣習と古代の法』（一八九一年刊）をつかっているし、「村落団集」とヴィレジ・コンミュニティを邦訳している。しかも彼は、コヴァレフスキーが「ミール」共産体を、一八世紀のはじめにうまれたものとしたことを紹介している。これもすばらしい紹介である。

コヴァレフスキーはモルガンのいうトライブ（部族）をとりあげていないが、「家族協同体」の歴史的地位を説く。彼による親族オブシチーナ↓村落共產体という発展図式が、「籍帳」にあらわれている郷戸をつかむのに参考になる。だが彼の発展図式が正しくないことを、いまは知らねばならない。しかもいまのわたしは、郷戸を家族協同体とみるよりも、むしろH・メーンにしたがって、「未分割合同家族」としておかねばならないところに立っている。

#### 四

「籍帳」の研究につながって、いまひとつのことは母系出自である。もっとも簡単には母系出自と母系相続をまとめて、「母権」ともされているが、この「母権」をみいだしたのが、J・J・バッハオーフェン（一八一五—一八八七）である。来年はその一〇〇年忌にあたるので、わたしはこれまでの三論文をあつめた「原始、母性は月であった」という小さい一冊を、「女性史双書」第一として刊行していただくことになった。

子は母にしたがって、母がぞくしている血縁者集団のものとなり（母系出自）、母の財をうけとり（母系相続）、母の兄弟である伯叔父の社会的地位をうけつぎ（母系継承）、母の兄弟は自分と深くつながる（伯叔父権）。母がぞくしている原始共同体であるトライブ、そのなかのゲンス（氏族）での母の権威、母にたいする尊敬、これらの総体を、疎外されていない共同体的人間関係であると、イギリス社会人類学者リヴァーズは定義して、バッハオーフェンの「母権」概念を、より豊かなものにしていく。

バーハオーフェンの主著は一八六一年に出版された「母権論」である。この本は一八九七年に未亡人によって無修正で復刻された（第二版。あるいは未亡人版）。一九四八年には、「バッハオーフェン全集」一〇巻のうちの第二巻第三巻の二冊本として刊行されたが、これが第三版である。

このような「母権論」を、バッハオーフェンの前半生の成果であるとする、後半生は『古代書簡』（第一巻一八八〇年刊、第二巻一八八五年刊）に結集されている。それで『母権論』は、原始ギリシャ・ローマの神話のなかから母権をひきだしたとすると、『古代書簡』は、おくれた未開人の生活についての民族誌的な諸著作から母権をひきだしている。神話のな

かからの母権は、たんなる神話解釈にすぎないと批判されたのをうけとめてのことかもしれないが、一八六五年刊のマックレナン『原始婚姻』が、バッハオーフェンの心を民族学にむかわせたらしくもある。一八六五月に彼は三〇才も若い女人と結婚し、その翌年に一人息子を生んでいる。さらにその年には裁判所をやめている。こうして彼は一八七〇年からあとの人生を、民族的に「未開母権」さがしにかけた。これによって神話からの「原始母権」の発見がたしかなものとしてうらづけられたのである。たとえば、バッハオーフェンが『古代書簡』にのせなかつた一つの遺稿のなかで、オーストラリア諸族での婚姻階級制度を論じている。この遺稿ではマックレナンのさきの著作が、いかにたよりないものであるかをのべ、しかもモルガンをこえさえもしているのである。

わたしが反訳したモルガン「幕末日本記」(『教育国語』第七八〇号、一九八四年九月)は、彼の著書『人類の血族と姻族の名称諸体系』によるものである。彼は幕末日本人の親族名称を採集し記録しているが、ついにながらに日本人の民俗を記述したのである。モルガンは日本とは無関係ではない。さらにわたしがモルガンの最初の著作である『イロクオイ族の連盟』の序文、目次を邦訳しているのを読んでほしい。

モルガンについては三〇あまりの論文をかいているが、ようするにモルガン、コヴァレフスキー、バッハオーフェンなどと、あちらの研究成果をまなびとるのにいそがしく、「籍帳」の研究が、あまりすすまなかつた。おくれて出発したうえに、あちらのことに深入りしてきたためである。だが、このことが幸いであつたとされもするのは、わたしの上代日本のつかみ方が、津田左右吉氏をうけいれながらも、そのさきにすすみでる基底をえたことである。

しかもわたしは、ウヂやカバネを検討することによって、大化改新にさきだつて二〇〇年間は、すでにプロト封建制のもとにあつたのではないかとみるにいたつている。もはや氏姓時代ではおかしい。このような時代の「籍帳」に、母系出自がみられるとするのは奇妙である。妻方居住婚もあるが、班田農民のあいだでは夫方居住婚がつよいのである。「籍帳」にみられる郷戸は家へ分解しつつあるが、これはウヂが家へ分立しつつあるのに対応している。のこされていることをこれからもときあかさねばならない。

※

研究のあとをかえりみよと、まったくすばらしい機会をあたえられ、しかもそれによって「籍帳」研究を一本にまとめるようにとうながされたのであるとさとられたのを、心あつく感謝しなければならぬ。

(一九八六・六・三〇)

編集委員会付記

本稿は、一九八六年六月一三日、本学会第九回研究大会(於・九大)における特別講演の原稿をまとめて頂いたものである。紙面の制約上、そのすべてを収録し得ず、講演会のために作成して頂いた布村先生の著作目録も割愛せざるを得なかった。この点ここに付記して、布村先生の御寛恕を願う次第である。